

基 調 講 演

「ぼくがすきな まちをすきな きみがすき」（中島 らも）

きしい たかゆき

岸井 隆幸

（(社)日本都市計画学会会長、日本大学理工学部土木工学科教授）

【プロフィール】

1953年兵庫県生まれ。

東京大学大学院修了課程をご修了後、建設省に入省され、

1992年からは日本大学専任講師、助教授を経て、

1998年から日本大学理工学部土木工学科教授。

2010年からは社団法人日本都市計画学会 会長。

専門は都市計画。1995年(社)交通工学研究会 研究奨励賞、

1997年日本大学理工学部学術賞

ならびに2009年(社)日本都市計画学会 年間優秀論文賞を受賞。

その他、社団法人土木学会 地下空間研究委員会委員長、

環境省「中央環境審議会」臨時委員、東京都景観審議会会長など多数の委員を務める。

主な著書に『次世代の都市構造に向けて一鉄道と地域との共益運営ー』、

『「道路」の機能と役割』、『都市計画の事業：計画を実行する手法』等がある。



今日のタイトルは、中島らもさんがつくられたキャッチコピー。今日は著作権も関係なく引用させてもらっているが、彼は私の中学・高校の同級生であり、了解してくれるだろうと思い、使っている。

このキャッチコピーは、6年以上前、ある財団法人の雑誌の創刊号に、自分の好きなまちを書いてもらうコーナーを設け、その時に、彼にお願いしたときに書いてきたものである。“好きなまち”を書いてくれと依頼したのだが、彼は、結果的には“きみがすき”と締め括っている。

このタイトルを少し噛み砕きながら、私が思っていることを紹介し、午後のディスカッションの参考になればと思っている。

□ふりかえれば・・・

江戸から明治時代にかけては水運の時代であった。鉄道も水運とともに成長した時代であり、この頃から近代化が始まっていく。

100年ほど前、六甲山は当時はげ山で貧弱であるということから植林が行われ、今では、海と緑に恵まれた神戸となった。

しかし、戦争、戦災復興と我々を取り巻く風景は大きく変化した。

国民生活に関する世論調査からの国民意識としては依然、中流階級意識が強いものの「物の豊かさ」より「心の豊かさ」に対する意識が高まっている。

ヨーロッパを見てもロンドンの地下鉄は狭いしブリュッセルの広場も決して清潔ではない。日本にはスラムもないし、東京の町の清潔感に外国から来た人の多くの人は感心する。

我が国は決して悪い国ではないが・・・。

□「いま」に潜むもの・・・

人口問題研究所の男女年齢各歳別人口をみると、1960年代は10歳に人口ピークがあり30歳以下の人口が過半を占めていた。施策は、子どものいる世帯をメインターゲットとしていた。

2010年では子どもから老人まで幅広く人口が分布しており、子育て、雇用、高齢者福祉等、全方位の総花的政策が必要となっている。

これが2030年代には高齢化が進展し、中高年が人口の過半を占める時代となるため、政策は高齢者向けにシフトせざるを得ない。

今後の高齢化を地域的に見れば大都市圏ほど高齢者人口の増加が激しく、農村部よりも深刻な状況となることが考えられる。

家族像を見てみれば2000年はまだ「夫婦と子ども」世帯が家族像であったが、2030年には単独世帯が激増する時代となる。

このように高齢化が大きな問題となってくるが、人が一日に何回行動するかというパーソナルトリップ調査をみると過去に比べて平成20年では高齢者のトリップ数が増加している。元気な高齢者が増加している半面、何故か若者の行動回数は減少している。

一方、年齢階層別通院患者率を見るとやはり高齢者の比率は高く、通院に伴うトリップ数の増加といった側面もあるのかもしれない。

いずれにせよ歩いて、街へ出ること、集いの場で社会と繋がりを持つ事が元気の源であり、そのような場をどのように準備できるかが、これからの社会において重要となる。

私が若かった頃の都市計画の理論である近隣住区論では、街の中心が教会や学校であり、それらを中心に住区の構成を考えていたが、これからは高齢者施設が街の中心という時代になるかもしれない。

車社会のアメリカでは、車利用が過度になり、ヒューストンでは駐車場の海の中に建物が埋没している。日本もこのような状況に近づいており、また、車がないと生活できない。事実、パーソナルトリップ調査で確認すると、一番動いていない中高年齢層は、免許をもっておらず、駅から1.5キロ以上離れたところに住んでいる人である。そういった人達が暮せるよう、車にあまり依存せず、自分達で歩くことをベースにする、まちに見直していく必要がある。

また、人の高齢化と同様に、都市も高齢化しており、街のインフラも古くなってきている。インフラを更新していく時にどういう街にしたいのか、しっかりとした将来像も必要である。

□夢なくして・・・

1962年、ヨーロッパでは千人あたり200台の車の利用がされていた。しかし大きな方向転換によりフランクフルトでは車主体の街から緑あふれる街に転換を進めた。

日本においても戦災復興で都市づくりを進めた仙台のように50年後に杜の都を形成した例もある。

街の魅力は集う魅力であり、それが都市の競争力にもなる。

魅力的なものがあるのに上手いかされず、もったいないと思う街がある。例えば、美術館といえば、パリに行けば必ずルーブル美術館に行くと思うが、日本ではどこにあるか。実は上野にある。上野には国立博物館と国立科学博物館という2つの博物館が並んでいる。しかし、残念ながら、上野の山にはその雰囲気は漂っていない。駅の出口もそれを連想させるようなものになっていない。

日本のまちの多くは城下町である。お城や堀がある。これら資産を上手く使っていく必要がある。今行うまちづくりは30年後に評価される。

□ぼくがすきな きみがすきな まちを一緒に創ろう

私は「ぼくがすきな、きみがすきな、まちを一緒に創ろう」と思う。この言葉は皆さんが発表されている活動がまさにその実践だと思う。

アメリカの大企業が良く用いる話を紹介する。オレンジを巡って姉妹が争っている。その時、お母さんは2人の話を良く聞いてやることが大事。良く聞けば、姉はママレードを作るために皮が欲しい、妹は中身が欲しいということで争わないで良いという話。現実はそのような上手いことはいくはずがない。

今度は、カステラを兄弟が分け合う話を紹介する。最初は、家庭で権威のあるお父さんが切ってそれを分け合う。しかし、いずれはそれが平等であるか信じられなくなってくる。次に、当事者のどちらかが切って、もう片側が選ぶ。これもいずれは平等に分けられているか信じられなくなってくる。2人が納得するためには、すべての行為に2人とも参加する必要がある。2人で切って2人で選ぶ行為が必要となる。行政について、昔は「人に任せられないから自分たちで行なうしかない。」と考えた。しかし、カステラ（行政）を36人で分けるとしたら、カステラは粉々になってしまう。すべてのことを自分達ができることはできないため、どうするか知恵をしぼる必要がある。誰かに6等分にしてもらい、それを6人で分けるとすると、これで分けられるピースはかなり減る。これが間接民主主義であるが、あいつと分け合うことは考えられないという場合、間接民主主義でもうまくいかない場合がある。

落語に、三方一両損、三方一両得の裁きの話がある。3両落とした者、3両拾った者、それを裁いた大岡が1両出して、3方がそれぞれ1両損して丸く収まるというもの。大岡越前が、武士の心で、一両を出したことに意味がある訳であり、今日来ている方々も、仲間の方々のために、武士の心で、汗をかいている。そういった動きが、人々の心を動かしている。

しかし、これをヨーロッパ人に話すとおかしいと言われる。最初から、落としたお金を拾った場合は1割もらうというルールをみんなに知らしておくべきだ。そうすれば、問題が起こることがないということになる。これが西洋の事前例示性、あらかじめルールを作っておく。これもありうるが、日本では、すべてのケースをルールにしていないのである。

「I wish to leave this world better than I was born（私が生まれた時よりも世の中を良くして逝きたい）」という考えが必ずみんなにある。武士の心や参加する機会をつくっていけば、いろんなチャンスが広がると思う。あきらめる必要はない。

まちを歩くと、ペットを連れて歩くことを勧める人がいる。日本人はまちで人とすれ違っててもあいさつもしない。しかし、ペットを連れて歩けば、ペットが吠えあったりして、嫌でも話が始まる。社会とのつながり、それも、ソーシャルキャピタルである。

「夢がなくて理想なし、理想なくして計画なし、計画なくして実行なし、実行なくして成功なし、故に夢がなくして成功なし」という吉田松陰の言葉がある。夢を持つ事が重要である。

夢があって、自分がそれをしようとして、それが将来必ず役に立つことであって、自分のためだけでなくみんなのためになるものならば、必ず共鳴する人が出てくる。自分のための部分があっても良いと思うし、楽しくなければ続かないと思う。



関西元気な地域づくり発表会

**ぼくがすきな
まちをすきな
きみがすき**

(中島らも)

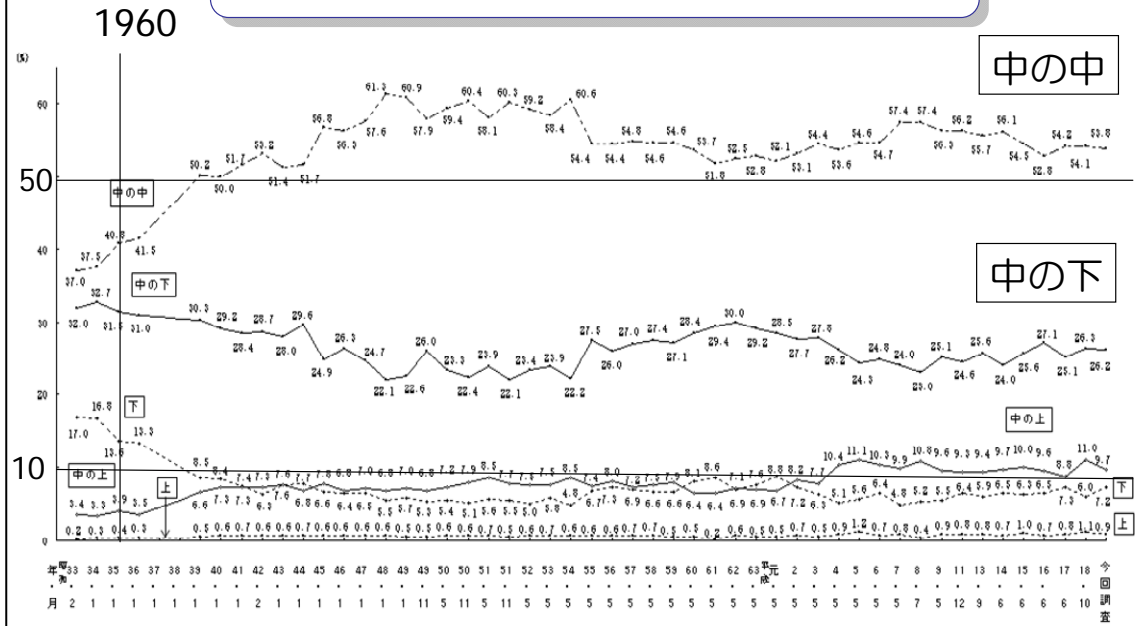
日本大学理工学部 土木工学科

岸井隆幸



ふりかえれば……

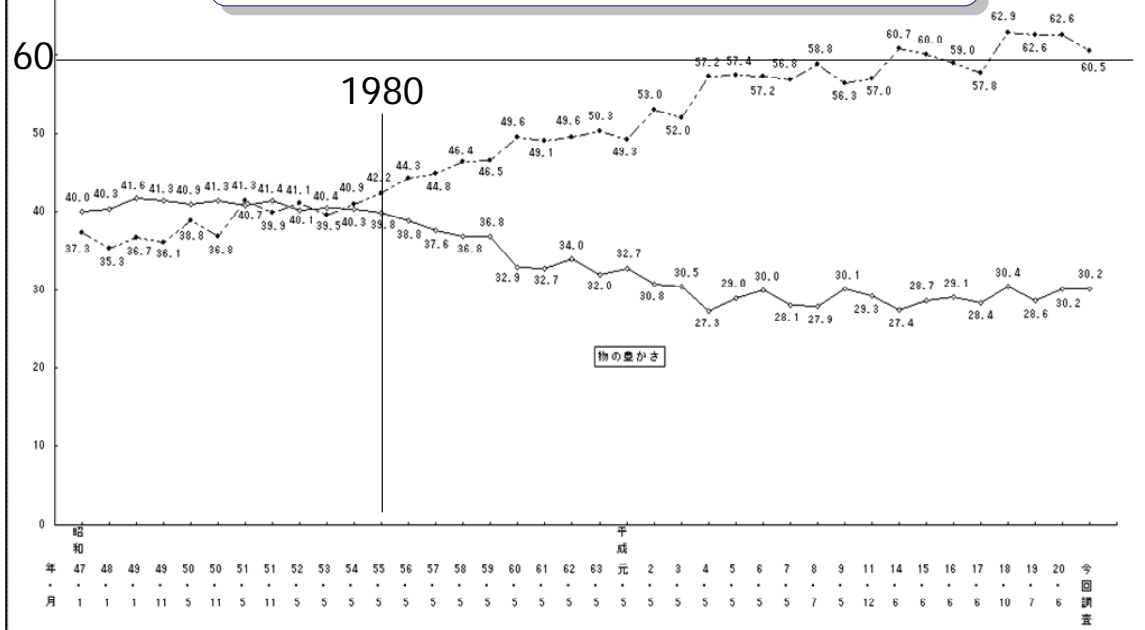
豊かさの実感 中流階級意識



(注) 昭和37年1月調査及び昭和38年1月調査ではこの質問は行われていない。
昭和42年2月調査から昭和44年1月までは対象者が世帯主、家事担当者。

内閣府 国民生活に関する世論調査 (平成19年)

「物の豊かさ」より「心の豊かさ」



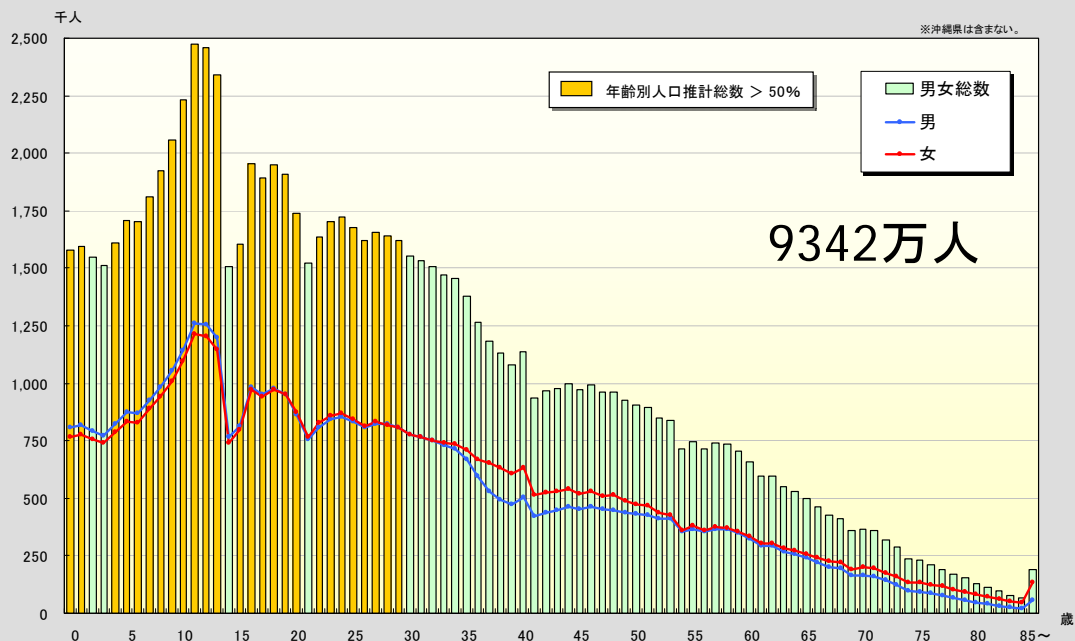
(注) 心の豊かさ → 「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活することに重きをおきたい」
物の豊かさ → 「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」

内閣府 国民生活に関する世論調査 (平成21年)

「いま」に潜むもの...

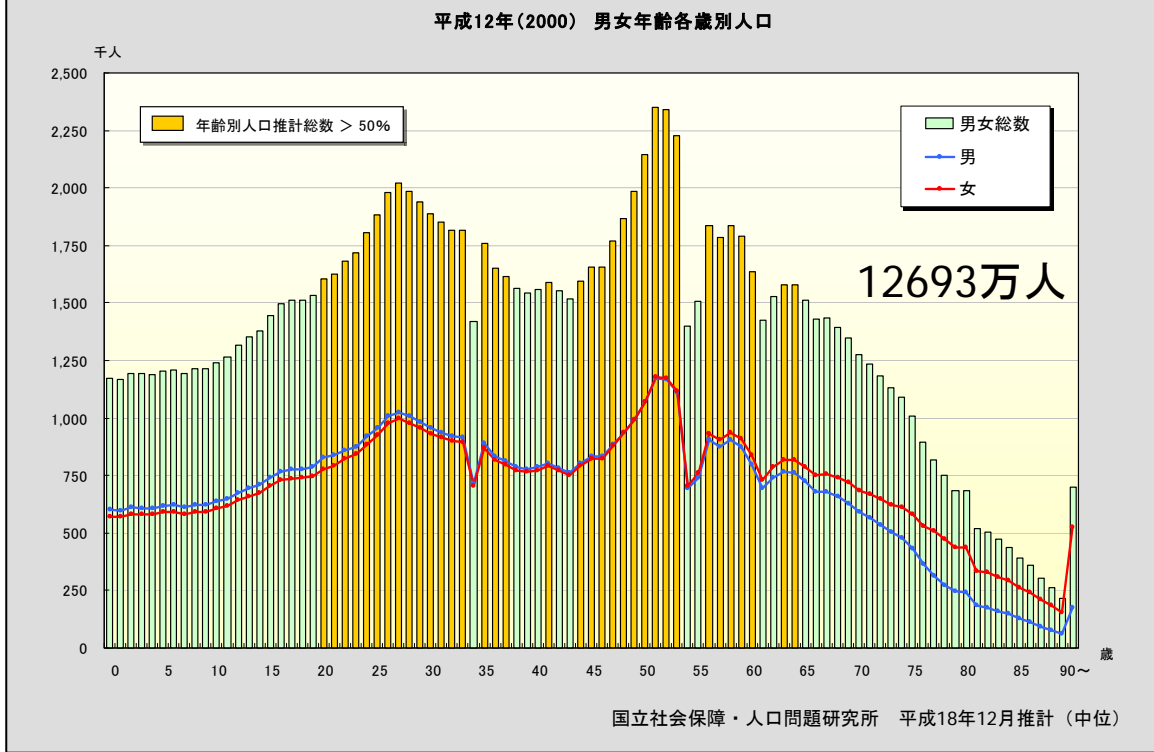
1960年 成長する家庭に向けた成長政策

昭和35年(1960) 男女年齢各歳別人口

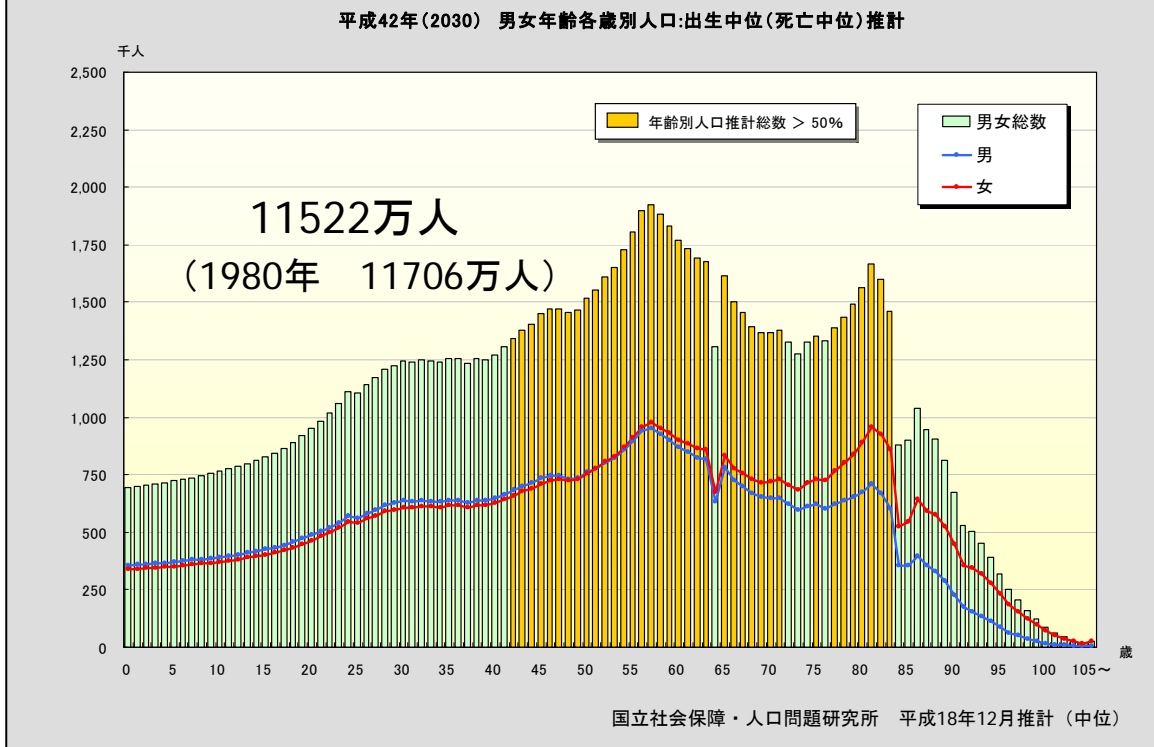


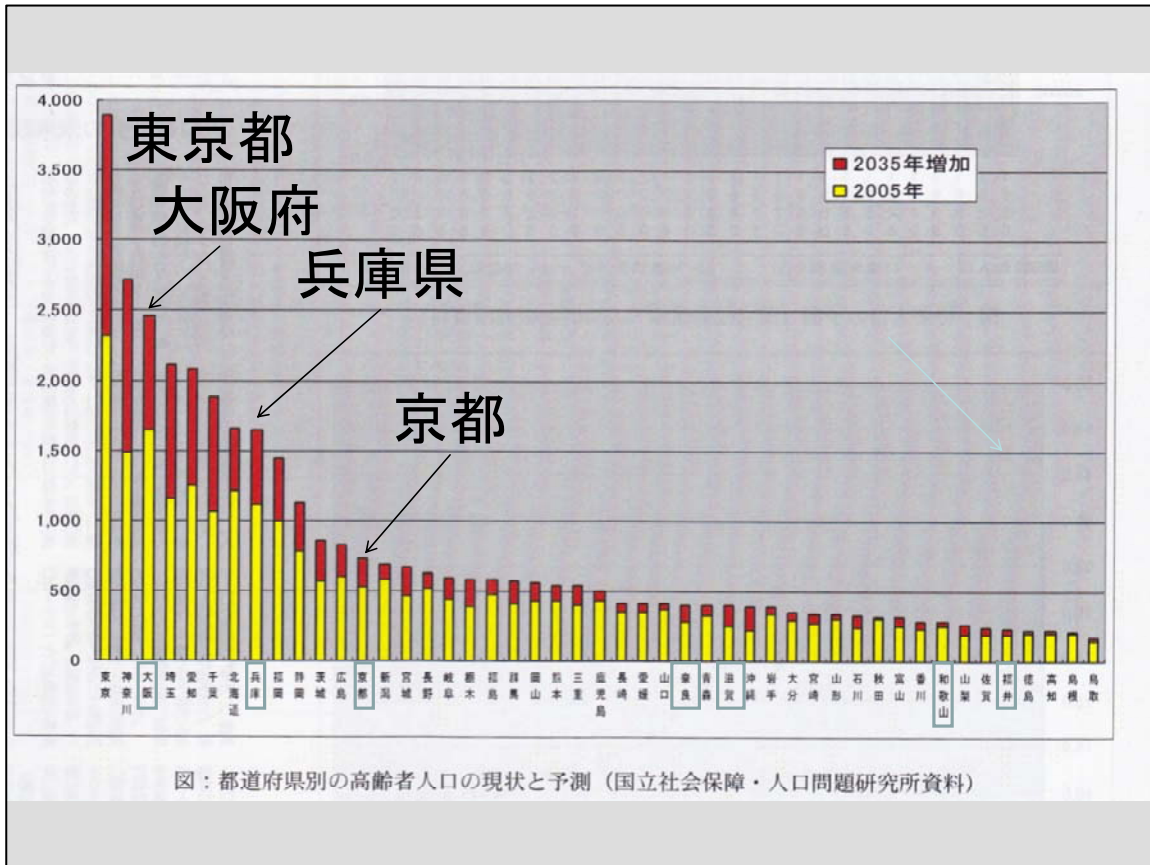
国立社会保障・人口問題研究所 平成18年12月推計(中位)

2000年 全方位の総花的政策による多数派獲得

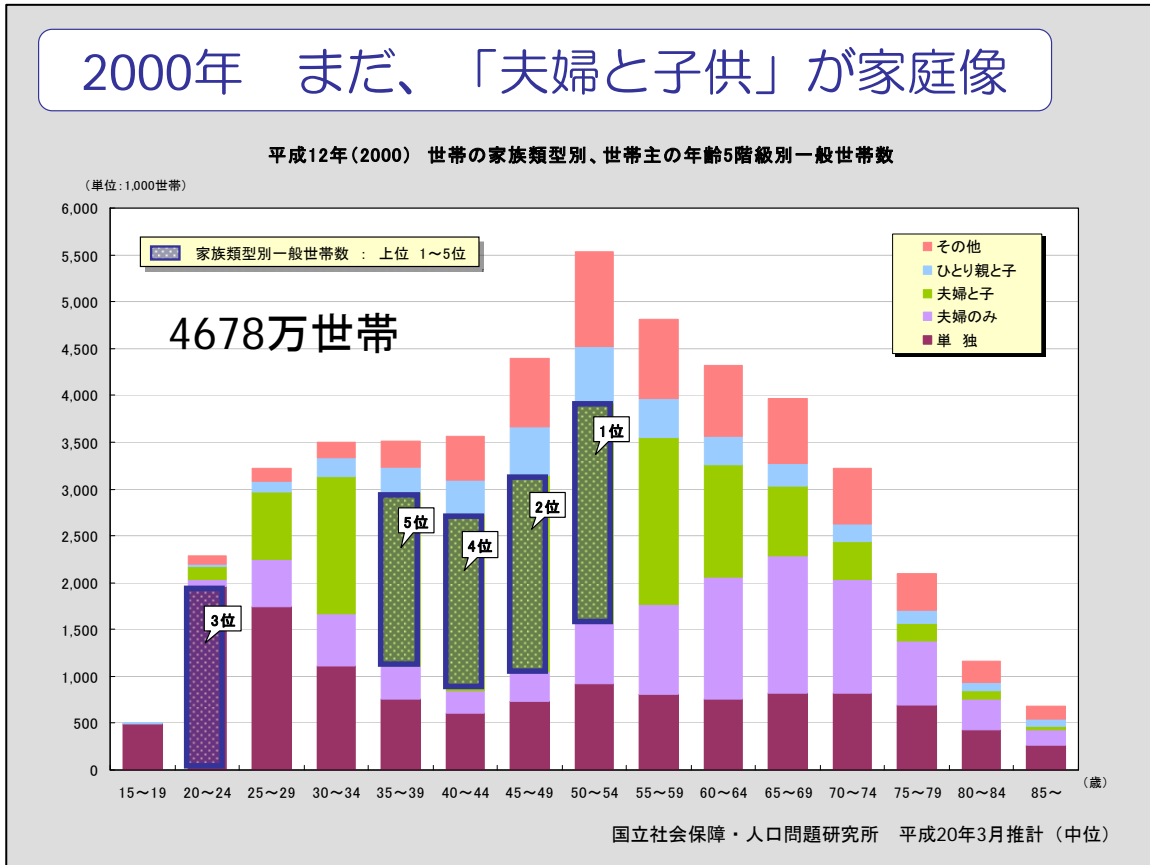


2030年 中高年を相手にすれば過半数



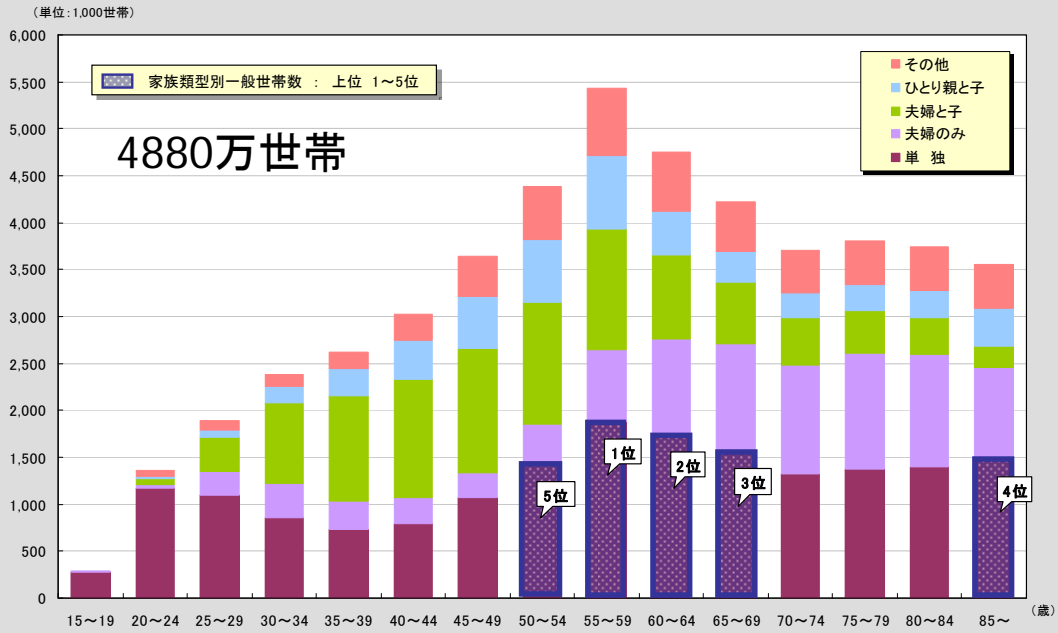


2000年 まだ、「夫婦と子供」が家庭像



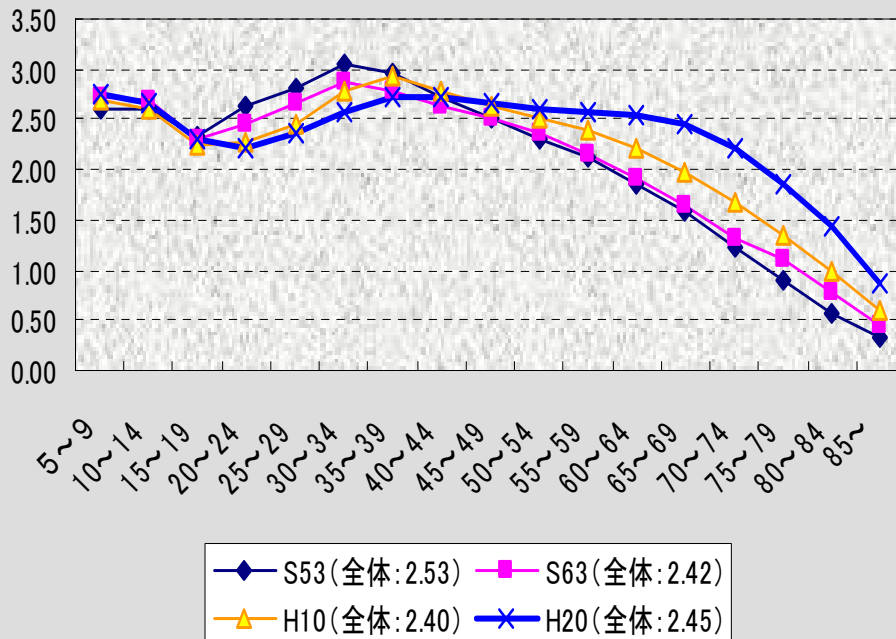
2030年 激増する単独世帯

平成42年(2030) 世帯の家族類型別、世帯主の年齢5階級別一般世帯数



どっかい 元気な 高齢者

生成原単位(トリップ/人)



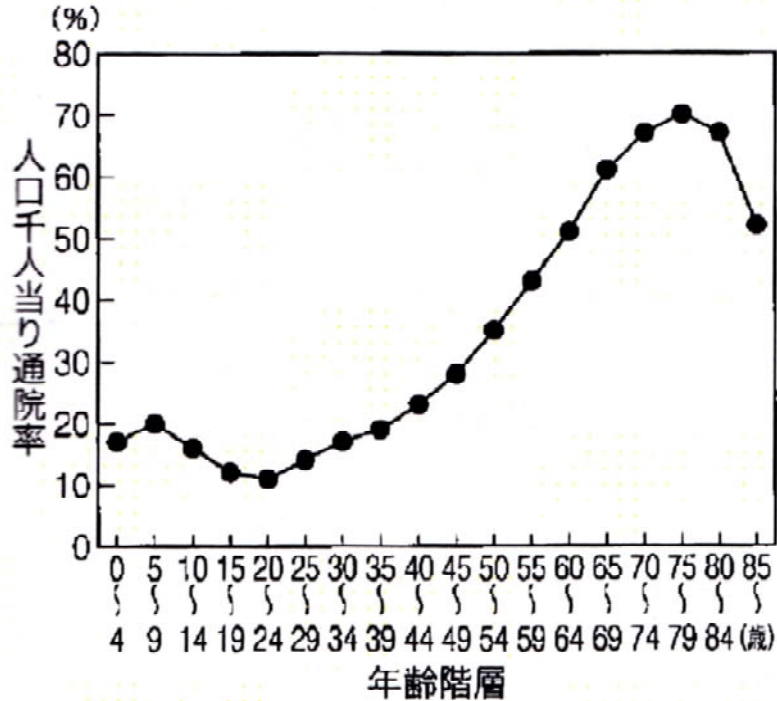
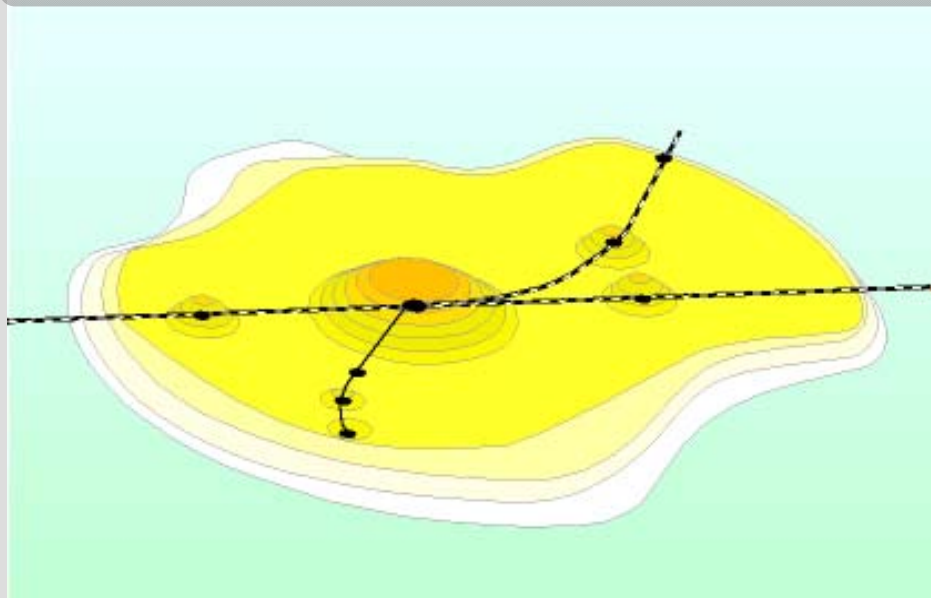


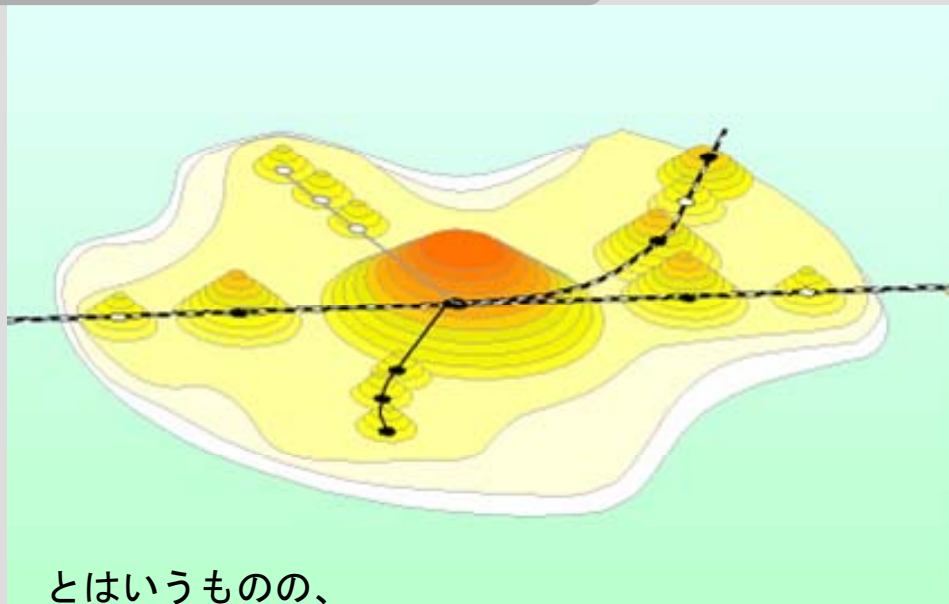
図 2・4 年齢階層別通院者率 (通院者数は 2007 年国民生活基礎調査、人口は 2007 年 10 月 1 日現在の値より作成)

低密度拡散型の市街地へ向かうと ----



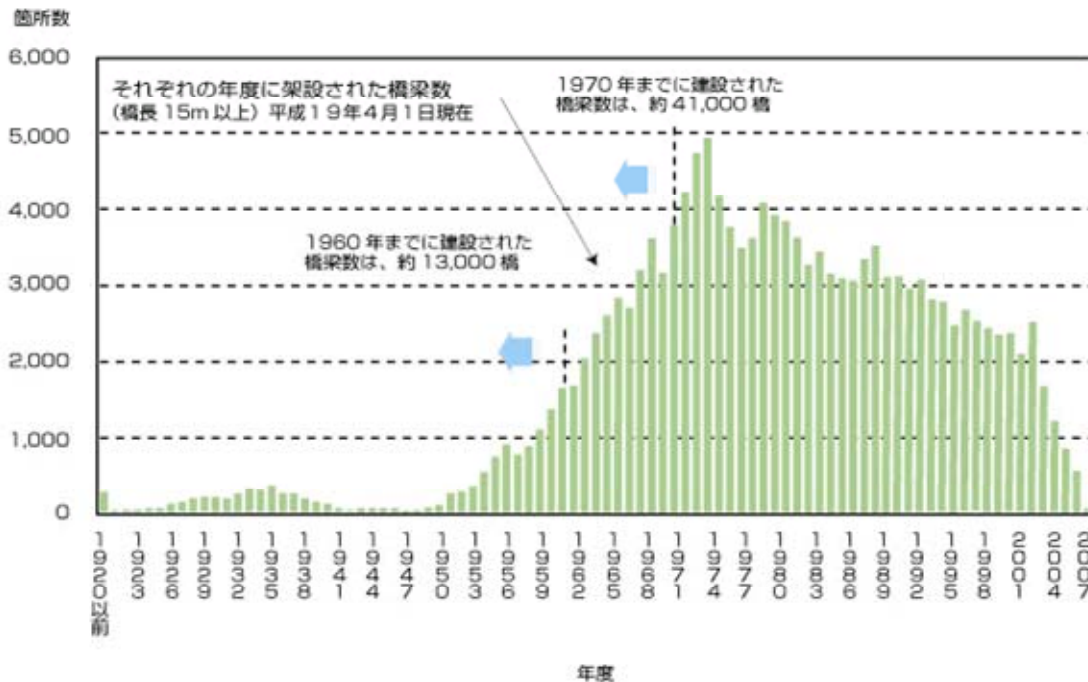
USA	ヒューストン	人口 206万人	1501 km ²
日本	名古屋	220万人	326 km ²

コンパクトな市街地へ



3232市町村（1999年度末）→ 1758市町村（2009年度末）
地方圏（36道県）の市町村 1995→2005で **74% が人口減少**

都市も高齢化している



出典：国土交通省国土技術政策総合研究所資料 第545号、
2009 平成20年度道路構造物に関する基本データ集

夢なくして...

ぼくがすきな

きみがすきな

まち を一緒に **創ろう**